
NATURAL * story

嘉手奈 * 燭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N A T U R A L * s t o r y

【Nコード】

N 6 6 7 9 A

【作者名】

嘉手奈*燭

【あらすじ】

人気BANDのギタリストと、主人公が会う

NATURAL*HEART

*主人公*和香野 琉

琉は、神戸に住む中学3年生。名前が琉球の琉と言うことで、あだ名が『シーサー』になってしまう・・・

ある日、琉がギターに目覚める。きっかけはNATURAL*HEARTというバンドのメンバーギター担当の晃流 秦に憧れ(?)、ギターに目覚めた。

夏休み、終業式が終わった後、親友の奈那が

「琉? 沖縄に一週間行くんだけど行く?」

と言ってきたのだが、琉は即答

「イヤ」

と返す。

だが奈那は琉を絶対に連れて行く様子で

「N*Hが夏フェスでライブのために来てるよ?」

「絶対行く!!!!!!」

と、琉の目が光る。

で来たものの・・・（海は大荒れ）

「なんでえゝ（、・・）ノ」

その日は台風が接近中・・・

菜那が、

「まあ今日はホテルでゆつくりしとこ?」

「えゝ」

「しょうがないじゃん!!」

「私、外に出る!!!!!!」

「琉！？外は台風・・・」
「パターン・・・」

「しょうがないか。N＊H目当てで来たんだし。でも外は台風！！」
琉~~~~~！」

奈那が止めに行く

その頃、琉は・・・

「あ、この店ってまさかギターショップ？ゴッド・・・GODS
OUND？？まあいつか」

店に入る

「いらつしゃい」

「これ（紙を見せる）・・・ありますか？」

「えつと・・・Gibson 1958 LESPAUL JUNI
OR DCですか。少しお待ち下さい。」

あたりを見回す - わあゝいっぱいあるな

店員が奥から出てくる

「すいません。在庫もちよつとないんです。」

「あのゝちよつと。」

見知らぬ男が店に入ってくる

「おう、秦。」

「久しぶりだな、鍛冶さん」

「二人は知り合いかな？」

「で、用件は？」

「ああ。さっきあんたらが話してたギターの事でちよつと」

「ギターね」

「名前は？」

と、琉を指す

「えっ・・・琉・・・和香野 琉です」

「ギターの種類は？」

「Gibson 1958 LESPAUL JUNIOR DC
ですけど」

「LESPAULか」

「それだったらあげる」

「えっ」

「ダメですよ。そんな高い物っつー!」

「いいの いいの。まだ何本があるし」

・秦は笑ってる

「でも・・・」

「それに、高いとか言っても・・・琉だっだけ？買おうとしてたじゃん」

「!!!!」

「それでも」

「人の好意は素直に受けるモノ」

「秦さん・・・はお金持ちですか？」

「アハハッ!! お金持ちじゃないよ。それと秦でいいし、多分、歳近いと思うよ?」

「秦・・・は何歳?」

・琉が恥ずかしそうに言う

「高1の16歳だけど」

「うそ・・・!」

・こんなにかっこいくて大人っぽいのに~~~~!!

「まあ まあ、でどうするの?」

「どうしよう・・・」

「はい」

・名刺?

「これ・・・ハッ!!!!」

職業欄を見る

NATURAL*HARD

ギタリスト

「えええつつ！！！N＊Hの・・・秦・・・？」

「そうだけど？」

・秦が微笑む

「まあいつでも来てよ」

「同じホテルだし・・・」

「その名刺は夏フェスの沖縄バージョン。でこっちもあげる。俺の住所入り」

「じゃあこれ私の名刺です・・・」

「ありがと。あっそうだケー番交換しようか？」

「はいつつ」

・ケー番を交換する

「じゃ、いつでも気が向いたときに遊びに来いよ。ギターの事とか話したりできるし」

「秦、いいのか？外・・・もうそろそろ帰らなくて」

・店員が入ってくる

「あっやばっ」

・女の人が店に入ってくる

「秦、こんな所にいたの」

「マネージャー」

「ホテルに帰るわよ、秦」

「なあ、マネージャー。琉・・・こいつもいいか？」

・秦が琉を引き寄せる

「いいけど、どこの子？」

「同じホテルのやつ」

「あら、そう。それじゃあいくわよ」

・車内

「琉はなんで沖縄に？」

「ええ~~~~~と（＂）友達が『N＊Hが来る』って言ってた

から」

「友達と二人で？」

「はい」

「そうか・・・わかった」

「????」

・ホテルに着く

「琉は何階？」

「私は6階」

「それがどうかしたの？」

「いや、同じ」

「そうなんだ」

「一緒に行こうか？」

「うん！」

・部屋に着く

「それじゃあ、また明日。じゃーなっ」

・『また明日』ってどういうこと~~~~?!!また会えるかな・・・

旅行二日目 (夏フェス リハ)

・琉が部屋を出ようとする

「琉、どこいくの？」

と、菜那

「ちよつと、ね」

「じゃあ昨日は何処に行ってたの？」

「ギターシヨップ」

「そう、確か琉って最近ギターにハマってたよね？」

「うん。でも今日はちょっとこら辺をちょっと散歩。それじゃあ行ってきますっ」

「行つてらっしゃい」

・琉が部屋を出る

「おはよう」

「えっ・と、あ おはようございますっ」

「そんなにかしこまらなくていいって」

・秦が笑いながら言う

「秦、今日はどうしたの？」

「一応、今日、午前中は夏フェスのリハ」

「午後は？」

「自由。なあ琉、リハ見に来る？」

「いいの!？」

「うん。だって昨日知り合ったばかりなのにお前といると楽しいもん」

「そんな・・・!!!」

・琉 脳内

きゃ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!!!

!!!!!!

口説いてる!?!?っていうか口説かれてる?!

・秦 爆笑

「ハハッ、そういう色々考えてて表情がコロコロ変わるところが面白いの!」

・琉 赤くなる

「どうした？」

・顔を覗き込む

「うっん、別に・・・!」

・また赤くなる

・し・・・秦の顔がつっ!!!

「琉、リハにそろそろ行こうぜ？」

「う・・・うんっ」

夏フェス会場

・琉、会場に驚く

「秦、今日って歌うの？」

「歌うのは立ち位置を決めてからね」

・立ち位置が決まり歌い始める

「すごい・・・！」

・歌い終わる

「琉、どうだった？」

「かつ・・・かつこよかった!!」

「喜んで頂けて嬉しいです」

（なぜいきなり敬語？）

「秦・・・は昼からどうするの？」

「さあ、どうしよう？」

「じゃあさ、N＊Hのメンバーに会える？」

・少し秦がムツとなる

「別に・・・いいけど」

「じゃあ、どこで待ち合わせる？」

・琉が嬉そうに言う

「昨日のGOD SOUNDで」

「分かった。それじゃあっ！」

「う・・・ん。」

・琉が戻ろうとする

「つつ・・・」

・秦は手を握る 琉が戻ってくる

「秦っ、一緒にホテルに帰ろ？」

「うん」

・ 帰り際

「そういえば、秦はいつ帰るの？ライブは明日だよな？」

「でさ、琉ってライブのチケット取れた？」

「うん。予約いっぱい取れなかった」

「そう・・・」

「でもつつ秦に昨日会えて良かったと思ってる！」

「うん。俺も。じゃ、はい。プレゼント。友達の分も」

「え・・・！！最前列？」

「うん。最前列でギター弾いてる俺がよく見える様に右より」

「へっっ！？」

（なんでそんなにサラリと言えるの~~~~~~~~！！？）

・ 秦が手を握る

「ちょ・・・っと」

「ライブのチケットの代金がわりにホテルまで。いい？」

「うん」

・ 恥ずかしそうに琉が言う

・ ホテルに着く

「後でな」

「分かった」

・ 琉昼食をすましギターシヨップへ行く

（秦達まだ来てない・・・？）

・ ギターシヨップのドアが開く

「琉？」

「秦！」

「一応みんな連れて来たけど・・・」

「やつほ！ドラム担当 栄希 昇也でっす！」

「ベース担当 曲埼 馨です」

「馨は大人っぽく見えても高2の16歳」

「へえ・・・」

「昂乃 弘耆・・・秦と同じギター担当だ」

「弘耆はこう見えても金持ち あ、ヤクザじゃないよ」

・昇也が言う

「ヤクザなんかじゃねえ!!」

・弘耆が反対する

「あはは」

・昇也が愉快に笑う

「棕は？」

「えつとボーカル担当の、茶宿 棕です」

「えつ・・・棕!？」

「う・・・うん」

「すごい!棕の声一度聞いてみたかったんだ」

・琉が絶賛

「琉!ちよつと・・・」

「何?秦」

「あいつらさ、結構口説くの上手いから気をつけろよ」

「分かった」

「ねえねえ琉っていうんでしょ？」

・昇也がきく

「うん」

「そついえば午前中のリハに来てたよな？」

・馨が言う

「確か秦つてそのこの事話す時つごい楽しそうだったよねえ」

「わっ・・・ばっ」

「え?どういう意味？」

「ううん何でもないよ」

・秦がごまかす

「それに、秦つて琉ちゃんの・・・」

・秦が棕の口をふさぐ

「まあそついう事はおいといて・・・」

「ねえねえ2琉ちゃんって何歳？そんでどこに住んでる？」

「中3で神戸に住んでる・・・」

「へえ。いいな」

・弘壺が嬉しそうに言う

「でも私はほかのところに住みたい」

「なんで？」

「うっん秦の家の近くに住めたらいいなって。FANとして」

「別にFANとしてじゃなくってもいいのに」

・店員が

「よお久しぶり、みんな」

「鍛冶さん！久しぶりっ」

「みんなでかくなったな。そういえばあんときはまだお前らは中2
か中3だったよな？」

「そうそう」

「なあどっか行こーぜ」

「うん」

「でもさ、あんまうつくなつてマネージャーから言われてんじや
ん」

「あとホテルも違うし」

「いや、ホテルは一緒だ」

「そうなんだ！」

・メンバーが驚く

「ホテル戻ってゲームでもする？」

「いいよ」

・と琉が言う

「じゃ戻るか」

・ホテルに着き、遊び終える

「琉、俺明日の朝からいないから。じゃあな、明日のライブに絶対に
来いよ！！」

「さあどこに行くか白状しなさい!!」

「つつ・・・」

(やばい~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

・ライブ終了後、楽屋

「お疲れ様です」

「そうだ、椋、今日ノド大丈夫だったのかよ?」

「うん。今日は調子良かったから」

・楽屋のドアが開く

「おっおつかれさま〜 (涙)」

「琉!」

「秦、一人ちよつというけどいい?」

「?別にいいけど」

・奈那が出てくる

「わ~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!ほんとにN＊Hだ~~~~~!!!!!!す

ご~~~~い!!!!」

「へえかわいいね〜」

・昇也が口説き始める

「奈那ちゃんは誰のファン?」

「私は昇也のファン!」

「へえ 俺のファンなんだ」

「なあ琉、この後の打ち上げにでるか?お前の友達に内緒で」

「うん。」

「わかった。別に私服でいいから」

・打ち上げの時間

・ドアを開け、中に入ろうとする

「君、誰だ?」

「あつ、すみません社長。彼女俺がよんだんです」

「そうか」

「あつ、秦、これっ」

- 琉の部屋の前

「やべえ。俺、琉が起きる前に何しようとした？」

- 琉が部屋から出てくる

「待った・・・？」

「うん、全然。それよりどっか食べに行こっか」

「うん！」

- 町を歩く

「なんで沖縄の事いろいろ知ってるの？」

「んーとね、N＊Hがデビューする前に一人沖縄に住んでるやつがいたの」

「えーつと確か・・・弘吉！！」

「そ。で、弘吉とはあのギターショップで会ったの」

「そうなんだ」

「あの店の鍛冶さんが音楽好きだって紹介してくれたってわけ」

「以外」

「まあそれから弘吉と話が合うようになって、昇也と馨と棕をつれて沖縄へ来たらますます

仲が良くなつて。それでバンドN＊Hを結成したわけ」

「だから詳しいんだ」

「それに沖縄って観光だけじゃなくっても楽しいし」

「だって今回は秦に出会えたから・・・」

「俺も。あ、ここ入る？」

- 秦が店を指す

「喫茶？」

「うん。でもちょっと違うけど」

「じゃあ入る！」

- 店に入りオーダーする

「秦は今日こんなにうるついていいの？」

「別にいいんじゃない？うるついてても」

「曲は誰が作ってるの？」

「みんなで作るときもあるけど、大体、棕と馨と昇也が作ってる。むしろみんなで作る方が

少ないの」

「秦と弘壺は？」

「俺と弘壺はギターオンリー」

「ギター好き（笑）」

「そうだよ」

「ふふふ・・・」

「ちよつと変わった笑い方？をする琉

「琉・・・」

「何？」

「秦が琉の顔に触れる

「どうしたの？」

「秦が我に返った様子・・・」

「秦・・・？」

「ああ・・・ごめん」

「何誤ってるの？誤る必要ないのに・・・」

「？なんで」

「やつ・・・別になんでも・・・！！」

「なぜかこの時から二人の関係はギクシャクし始めた・・・」

「喫茶から出る

「ねえ・・・」

「何？」

「秦って好きな子いる？」

「いるよ」

「少し残念そうに

「そう」

「なあ琉、これいる？」

「これって・・・？」

「これ・・・」

・秦がラッピングしてある箱を取り出し、琉に渡す

「何・・・？」

「ホテルに帰ってから開ける（〃）」

・秦が顔を赤らめて言う

「え・・・？」

・琉は不思議に思っている

「いいから！！」

「うん、わかった。ホテルに帰ってから開けるね」

「琉、どっか行く？」

「じゃあさ、どっかで買い物しょ？」

「いいけど」

「どっかいい店ある？」

「結構あるよ」

・ホテルの帰り道

「秦は明日帰るんでしょ？」

「帰るよ。東京に何時頃？」

「さあ・・・。じゃあさ、あしたメールするから見送りに来てよ！」

「絶対に行くよ」

・ここから少しずつ話が途切れていって、恥ずかしいようで
秦の顔も見ることができなかった

・ホテルに着く

「じゃあさ、明日メールするから絶対来いよな！」

「分かつてる」

「また明日」

「うん・・・」

・部屋に入り、ベッドに寝転がる

「そうだ、あの包みの中に何が入ってるんだろっ?」

・どきどきしながら包みを開けてみる

「なに・・・? ネットレス!？」

「あーかわいいー」

「奈那っ」

・秦はなんで私にネットレスをくれたんだろう????

・この4日間、夜には『また明日』って秦に言われてたけど、そんな日はもう今日で

終わりになる・・・

・このときから寂しさを感じていたのかもしれない

旅行5日目 別れ

A M 9 : 3 0 - 秦からメールが届いた

『あのギターショップの前で待ってる』

という内容だった

「奈那、ちよつと出かけてくる!」

「ちよつと・・・急になにつ・・・」

・ギターショップ前

「秦っ!!」

「どうしたの、そんなに慌てて」
「秦からのメールだったから、早く行かなきゃって」
「俺のため？」
「そう・・・かな？」
「ありがとう」
「秦、琉に抱きつく」
「秦・・・。」
「少しの間、こうしててもいい？」
「う・・・ん」
「5分近くが経つ」
「あ・・・ごめん長すぎたよな。少しの間だけって言ったのに」
「琉から離れる」
「悪くなかったよ・・・秦なら許してもいい」
「俺だけ？」
「秦は特別」
「そうだ、あの包み開けてみた？」
「うん。開けたよ」
「秦が顔を赤くする」
「秦は私の事ただのファンだと思ってる？」
「会った時にはそう思ってたかもしれない。だけど一緒にいるうちにすごく特別な存在」
「になっっていった・・・」
「私も同じ。ていうかホンモノに会う前も特別な存在だったかも」
「琉は俺にとつて唯一の恋愛対象になった女の子」
「それって・・・？」
「はつきり言くと、好・・・き・・・かな？」
「秦は顔を真っ赤にして言っている」
「『かな』じゃなしにはつきりいつてよ!」
「じゃ好き」
「私も同じ」

・キス

・空港

「じゃ、これからはメールするからな」

「私はぜったいするよ！」

「たまにこっそり会いに行くかも」

「その方が嬉しい」

「あのネックレス大切に」

・ネックレス、とても大切な物だよ・・・秦

「じゃーな」

「うん」

・キスをする

「遠距離恋愛か」

「奈那っ!!」

「隠さなくてもばらさないって」

「む~~~~」

「じゃあたしらは観光の続きでもしましょうか」

「じゃ行こ~~~~!!」

・秦に出会ってからたったの4日で両想いになったのはすごく嬉しい
い

「だけど・・・遠距離恋愛っていう所が寂しいな・・・」

「次はいつ会えるだろう？」

「やっぱり、恋に支障はつき物だなあ」

（後書き）

もう、楽しんでください（笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679a/>

NATURAL * story

2010年12月30日20時48分発行